Introduction

日英語対照による

英語学概論

増補版

＊編集＊ 西光義弘

＊著＊ 窪薗晴夫 影山太郎 三原健一 高見健一
杉本孝司 西光義弘 西村秀夫 金水 敏

to English Linguistics

Kurosio
くろしお出版

日英語対照による

英語学概論

増補版

くろしお出版

H31
J105

日英語対照による　英語学概論

1997年　2月20日　　　第1刷発行
1997年　9月　2日　　　第2刷発行
1999年　1月　1日　増補版　第1刷発行

編者　西光義弘
版元　くろしお出版
〒112-0002 文京区小石川 3-16-5
TEL (03) 5684-3389
FAX (03) 5684-4762
組み　SAWANDA & CHAIPOTE
刷り　モリモト印刷
装丁　藤田里子
製本　坂本製本所

© Kurosio Publishers

無断コピーお断り

ISBN4-87424-169-7 C3081

まえがき

英語の教職科目で必要ということもあって、英文科がある大学では英語学概論の授業が行われている。従来、ほとんどの場合、英語という言語の輪郭をまずつかむための授業となっていて、様々な教科書が出版されている。今更新しい教科書をつくる必要性はないように思われるかもしれない。言語学および英語学の研究において、母語話者としての直感が重視されるようになって久しいが、不思議なことに、母語話者としての直感がきく日本語の分析を土台として英語の分析へ進むという、日本語と英語の対照を基本とした教科書は、今まで存在しなかった。そこで、日本語と英語を対照することによって、どのような利点があるかを考えてみよう。

まず第一にあげられるのが、母語である日本語については微妙な言語直観を働かせることができるということがあげられる。日本で英語学を勉強した人が英米に留学すると、レポートや論文のテーマとして日本語に関するものを選ぶことが多い。ひとつには、英語を題材にすると、非常に微妙な文法性の判断が必要であることが、最近の理論の発展によって多くなっているということがあげられる。そこで、細かいところまで直感のきく日本語を対象言語として選ぶことになるのである。それまでに日本語についての概略をつかんでいない場合、少々努力が必要になる。このような状況がもうかなり長い間続いているが、日本の大学におけるなわばり意識のせいか、英文科で日本語のことを題材にすべきではないという意識がいまだに強いようである。純粋主義に基づいて英語だけを題材にすることに徹すると、どうしても隔靴掻痒の感が免れない。言語研究の楽しさを実感するためには、無意識下にある言語直感を掘り出すことによって、隠れていたものを発見をすることが大きな役割を果たす。その意味で、表面的には見えないものを探り出すために、母語を透徹した形でじっくりと注意深く観察しなければならない。

第二に、英語と日本語は多くの面で対立的なので、言語のタイプを知るのにはこの2つの言語から出発するのが手っ取り早い。もちろん、世界には日本語とも英語とも異なるタイプの言語があるから、言語類型論の概観の中で英語と日本語の占める位置を確認する必要がある。単に日本語と英語の輪郭を知るだけでなく、日本語と英語はどのようなタイプの言語であるかということを確かめる

べきである。また、本書では他の言語についてはふれないが、できれば多くの英語や日本語と異なるタイプの言語に触れることによって、幅広い立場から現象をみる目を養うことが望ましい。

本書の執筆陣は、大半が関西言語学会の中心メンバーである。執筆者および編者が学生時代に大阪外国語大学大学院の林栄一教授と寺村秀夫教授による共同ゼミにおいて育まれた、日英対照の基本的態度が本書のバックボーンとなっているといっても過言ではない。黄金時代といわれたその当時の知的興奮を、少しでも今の学生諸君に感じていただければ幸いである。

本書は日英語対照研究シリーズを母体として企画されたもので、学部学生が日本語と英語について学ぶなかで、言語研究の方法を身に付けることをねらいとしている。本書で日英語対照研究に対する興味を持った諸君は、ぜひ本格的な研究書のシリーズである日英語対照研究シリーズを読んでみられることをおすすめする。また、本書と研究シリーズとの間に中間的なものが必要な場合のために、新たにセミナーシリーズが企画されているので、英語学特殊講義や英語学演習などの英語学概論を既習済みの学生のための授業、あるいは学生諸君の自習のために用いることができるであろう。

本書の企画段階においては、神戸大学文学部の同僚である柴谷方良教授と共同で作業が行われた。ところが編集段階になって、柴谷教授はUCLAの客員教授として1年あまり海外ですごされることとなり、編集の任は西光、およびくろしお出版の沢田博美氏が専らあたることとなった。その間、原稿を早く出していただいた著者の方々には1年間予定を遅らせた出版となったので、多大なご迷惑をおかけすることとなってしまった。ようやくこのたび出版の運びになったことは大きな慶びである。当初は西光と柴谷教授の共同編集で企画されたのであるが、柴谷教授は編集には直接あたらなかったので、編集者からご自分の名前をはずして欲しいとのたってのご希望で、西光一人の編集という形になった。しかしながら、企画段階での柴谷教授のご助言はいろいろの形で生かされているものと信ずる。本書の改訂版が出版されるときには、柴谷教授に編集および執筆に積極的にご参加いただけることを願っている。

1997年　春　　西光義弘

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

まえがき …… i
執筆者一覧 …… x

第1章　音声学・音韻論 …… 1

はじめに …… 2
1.1　発話のメカニズム …… 2
1.1.1　発声と調音 …… 2
1.1.2　母音の記述様式 …… 3
1.1.3　子音の記述様式 …… 5
設問　1 …… 8
1.2　音素と異音 …… 9
1.2.1　定義 …… 9
1.2.2　ミニマルペアと相補分布 …… 10
1.2.3　母音体系 …… 12
1.2.4　子音体系 …… 14
設問　2 …… 15
1.3　音節 …… 16
1.3.1　定義と役割 …… 16
1.3.2　モーラと音節 …… 18
1.3.3　子音結合と音節構造 …… 20
1.3.4　母音と子音の結合度 …… 23
設問　3 …… 25
1.4　語アクセント …… 25
1.4.1　定義と役割 …… 25
1.4.2　ピッチアクセントとストレスアクセント …… 29
1.4.3　複合語アクセント …… 31
1.4.4　文強勢 …… 34
設問　4 …… 36
1.5　イントネーションとリズム …… 37
1.5.1　語ピッチ言語とイントネーション言語 …… 37
1.5.2　音節拍リズムと強勢拍リズム …… 39
1.6　まとめ …… 42
設問　5 …… 43
Further Reading …… 44

第2章　形態論とレキシコン 47
2.1　形態論の仕事 48
2.2　語の特徴 51
2.2.1　音声的なまとまり 51
設問　1 53
2.2.2　名付け機能と意味の慣習化 53
設問　2 54
2.2.3　生産性と語彙的制限 54
設問　3 58
2.2.4　統語的な要素の排除 58
設問　4 59
2.3　形態素分析 59
2.4　語形成過程の種類 63
2.4.1　偶発的な語形成 63
新造語 64
借用 64
固有名詞の普通名詞化 65
設問　5 65
設問　6 65
2.4.2　少し規則的な語形成 66
逆形成 66
短縮 67
頭文字語 68
混成 70
設問　7 70
2.4.3　規則性の高い語形成 71
複合 71
設問　8 74
設問　9 75
設問　10 77
設問　11 79
設問　12 83
設問　13 83
派生 83
設問　14 85
設問　15 86
設問　16 87

設問 17 87
設問 18 90
転換 90
設問 19 91
設問 20 94
Further Reading 95

第3章 統語論 生成文法 97
3.1 句構造 98
3.1.1 ことばの構造 98
3.1.2 日英語の語順 98
3.1.3 構成素 100
3.1.4 主要部 102
3.1.5 動詞句の階層構造 103
3.1.6 X' 式型 106
3.1.7 「文」の扱い 107
3.1.8 従属節の扱い 109
設問 1 111
3.2 格と意味役割 112
3.2.1 抽象格 112
3.2.2 格フィルター 115
3.2.3 英語の不定詞節 117
3.2.4 PRO 118
3.2.5 日本語の主格付与 120
3.2.6 ゼロ代名詞 121
3.2.7 意味役割 121
設問 2 123
3.3 移動 123
3.3.1 表示のレベル 123
3.3.2 WH 移動 125
3.3.3 島の制約 126
3.3.4 下接条件 127
3.3.5 繰り上げ構文 129
3.3.6 受動文の派生 130
3.3.7 移動のタイプ 132
3.3.8 生成文法の基本的発想法 133
設問 3 134

Further Reading 134

第4章 統語論 機能主義 137
4.1 はじめに 138
4.2 文の情報構造 139
4.2.1 主題と題述 139
4.2.2 主題、対照、総記、中立叙述 140
4.2.3 新情報と旧情報 142
4.2.4 焦点 145
4.2.5 焦点位置と移動 146
設問 1 149
4.3 関係節 151
4.4 代名詞照応 155
4.5 省略 160
設問 2 164
4.6 視点 166
4.7 数量詞の作用域 173
4.8 結び 178
設問 3 180
Further Reading 181

第5章 意味論 185
5.1 分野と立場 186
5.2 さまざまな意味関係 190
5.2.1 多義性(ambiguity) 190
5.2.2 同義性(synonymy) 192
5.2.3 能動文と受動文(active and passive) 192
5.2.4 前提(presupposition) 194
5.2.5 語の意味情報 196
設問 1 199
5.3 形式意味論のアプローチ 201
5.3.1 文と命題 201
5.3.2 命題論理 202
設問 2 208
5.3.3 形式意味論的アプローチの特徴 208
5.3.3.1 文の意味 208
5.3.3.2 モデル 212

5.3.3.3 形式意味論から見た命題論理 215
設問 3 217
5.4 認知意味論のアプローチ 218
5.4.1 認知的ということ 218
5.4.2 メタファー理論 222
5.4.2.1 背景 222
5.4.2.2 文字通りの意味とメタファー 224
5.4.2.3 概念領域の多様性 225
5.4.2.4 語の多義性とメタファー 226
5.4.2.5 推論とメタファー 229
5.4.2.6 複数のメタファーによるターゲットの理解 232
5.4.2.7 意味論の在り方 235
設問 4 238
Further Reading 240

第6章 語用論 243
はじめに 244
6.1 文脈における言語の使用 244
6.1.1 プロソディ依存型の英語とセグメント依存型の日本語 246
6.1.2 複数の派生的意味 246
設問 1 247
6.1.3 談話の流れ 249
6.1.4 文のかたちと機能のずれ 251
設問 2 251
6.1.5 派生的意味の慣用化の度合 251
設問 3 253
6.2 グライスの会話の協調原則 253
設問 4 256
設問 5 256
設問 6 256
設問 7 256
6.2.1 日英語間のずらす程度の違い 257
6.2.2 談話の流れと間接発話行為 258
設問 8 258
6.3 ポライトネス 258
6.3.1 直接依頼回避の方策 259
6.3.2 日英語の同義表現の意味合いの違い 260

6.4 発話行為 261
設問 9 262
6.4.1 遂行文の文法的制約 262
6.4.2 3種の発話行為 263
設問 10 263
6.4.3 発話行為の条件 263
設問 11 264
6.5 間接発話行為 264
6.5.1 間接発話行為における日英語の違い 266
6.5.2 文法化の問題 269
6.5.3 日本語の間接発話行為 269
6.6 命令文·依頼表現の日英語対照 271
6.6.1 日英語の命令文 271
6.6.2 依頼表現の日英対照 272
6.6.2.1 Will you 273
6.6.2.2 命令文, will you? 275
6.6.2.3 Can you 276
6.6.2.4 Will youとCan youに関するアンケート調査 277
6.6.3 Will youとcan youの押し付けの度合の違いはどこからくるのか 278
6.6.4 自己中心型の英語と相手中心型の日本語 279
6.7 日本語の謙遜志向と英語の自己主張志向 282
Further Reading 283

第7章 英語史・補説 日本語史 287
7.1 英語以前 288
7.1.1 インド·ヨーロッパ語の発見 288
7.1.2 対応の発見と再建 288
7.1.3 インド·ヨーロッパ語族 289
7.1.4 グリムの法則 291
7.1.5 内面史と外面史 292
7.1.6 外面史概観(1) 292
設問 1 292
7.2 古英語 293
7.2.1 英語史の時代区分 293
7.2.2 外面史概観(2) 294
7.2.3 古英語の文献 297
7.2.4 古英語の音韻論 299

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

7.2.5　古英語の形態論 300
7.2.6　古英語の統語論 303
7.2.7　古英語の語彙 305
設問　2 307
7.3　中英語 309
7.3.1　外面史概観(3) 310
7.3.2　中英語の文献 313
7.3.3　中英語の音韻論 316
7.3.4　中英語の形態論 318
7.3.5　中英語の統語論 320
7.3.6　中英語の語彙 323
設問　3 324
7.4　近代英語 325
7.4.1　外面史概観(4)　－1500－1650年 325
7.4.2　外面史概観(5)　－1650－1800年 328
7.4.3　近代英語の音韻論 330
7.4.4　近代英語の形態論 332
7.4.5　近代英語の統語論 334
7.4.6　近代英語の語彙 341
設問　4 344
7.5　世界の英語 344
7.5.1　アメリカ英語 345
7.5.2　黒人英語 354
7.5.3　オーストラリア英語 356
設問　5 358
付録　語形変化表 359
Further Reading 363
補説　日本語史 366
1　日本語以前 366
2　外面史概観 368
2.1　時代区分 368
2.2　上代 368
2.3　平安時代 369
2.4　鎌倉·室町時代 372
2.5　江戸時代 376
2.6　近代 379
設問　1 381

3 内面史概観 …… 381
3.1 語彙 …… 381
3.2 音声・音韻と表記 …… 387
3.3 形態論 …… 391
3.4 統語論 …… 398
設問 2 …… 401
Further Reading …… 401

索引 …… **403**

執筆者一覧

第1章 音声学・音韻論 窪薗晴夫(神戸大学文学部)

第2章 形態論とレキシコン 影山太郎(関西学院大学文学部)

第3章 統語論 生成文法 三原健一(大阪外国語大学外国語学部)

第4章 統語論 機能主義 高見健一(東京都立大学人文学部)

第5章 意味論 杉本孝司(大阪外国語大学外国語学部)

第6章 語用論 西光義弘(神戸大学文学部)

第7章 英語史 西村秀夫(神戸大学国際文化学部)

補説 日本語史 金水 敏(大阪大学文学部)

第1章　音声学・音韻論

窪薗晴夫

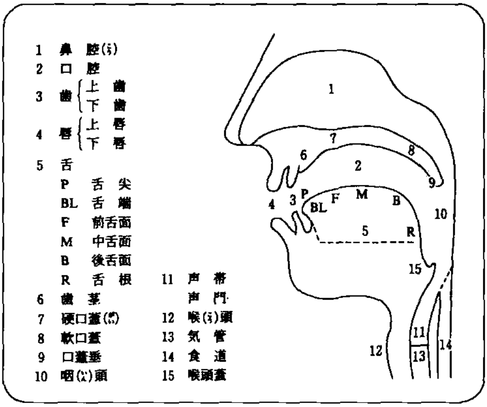
はじめに

日本語と英語は、耳で聞いただけではほとんど共通性のない言語のように聞こえる。日本人(日本語話者)が英語を英語らしく話すことができず、また英語話者の日本語が日本語らしく聞こえないというのは、このような相違点に起因するのであろうが、視点を少し変えて「言語の構造」というやや抽象的な観点から日本語と英語を比較すると、両者はどのような点で異なり、またその差異はどのくらい大きなものであろうか。本章では、日英語を他の言語と比較・対照することにより、両言語の体系上の相違点と共通点を明らかにしてみたい。本章は音声分析の基礎を論じた前半(1.1～1.2節)と、日英語の韻律構造(プロソディーprosody)を比較した後半(1.3～1.5節)から構成されている。前半では、音声学と音韻論の基本的概念を解説しながら、**分節素 segment** —— 一つ一つの「音」 —— のレベルでの日英語の共通点と相違点を比較し、後半では、音節・語アクセント・リズムといった韻律特徴に焦点をあてて、類型論的立場から日英語がどのように分類されているか解説する。

1.1 発話のメカニズム

1.1.1 発声と調音

[図1]発音器官(Organs of Speech)



人間は、特別な障害がない限り、自然に口から音声を産出する。この過程は、空気の流れを作り出す「肺」から、空気が出ていく「口・鼻」までの複数の器官による複数の機能に分解できる。この中で特に重要なものが、喉頭(こうとう)(つまりノ

ド)の活動と、喉頭から上の部分(咽頭・口腔・鼻腔)の活動である。このうち喉頭は、声帯の振動の有無によって「声」を作り出す機能と、声帯の振動の度合いによって「声の高さ(＝ピッチ)」を調整する機能の二つの機能を果たしている。前者は有声音と無声音を区別する機能であり、後者は語アクセント(1.4節)やイントネーション(1.5節)などの特徴を作り出し、また個人間の声の高さの違いを作り出す。

喉頭が「声」の産出・調整を行うということは、裏を返せば、喉頭を通過した段階では有声音(母音や有声子音)と無声音(無声子音)が区別されるだけで、[a]と[i]や、[p]と[t]といった区別はなされていないことを意味している。コミュニケーションに不可欠なこの過程を構成するのが、図1に示した発音器官である。喉頭を通過してきた空気の流れが口腔・鼻腔において実際の音声として産出される過程を**調音 articulation**と呼ぶ。

調音過程の中でも言語学的にきわめて重要なものが、**母音vowel**(Vと略す)と**子音 consonant**(C)の区別であろう。[a, i, u, e, o]などの母音と[b, z, m]などの子音の区別は、空気の流れが舌や唇などの調音器官によってどの程度阻害されるかによって作り出される(もっとも子音の中でも[p], [s]などの無声子音と[b], [z]などの有声子音は、上で述べたように、喉頭の段階で区別されている)。口が比較的開いた状態で、舌や唇などに阻害されずに空気が比較的自由に流れていけば母音が産出され、そうでなければ子音が産出される。母音の中でもっとも母音性が高い ―― つまり空気の流れが自由である ―― のが[a]であり、逆に母音性が低いのが[u]や[i]である。空気の流れが阻害される子音の場合でも、その程度が数段階に分類できる(1.1.3 節)。

1.1.2　母音の記述様式

母音は、喉頭において声帯の振動が伝えられた(つまり有声となった)空気の流れが、舌や唇などによって大きな妨げを受けないまま口や鼻から出て行くこ

とによって作り出される音である。このようにして産出される母音は、おもに(a)舌がどのくらい高くなるか、(b)舌のどの部分が高くなるか、(c)唇が丸くなるかならないか、以上の三つの尺度によって分類される。このうち(a)にあげた**舌の高さ**(tongue height)は、口がどのくらい開くか(**開口度**)という伝統的な分類基準と同義であり、一般に口の開きが大きくなればなるほど(上顎に対する)舌の位置は低くなる。この相関は、口の開きが下顎の上下移動によって作り出され、舌が下顎と並行した動きを示すことによって作り出されるものである。舌の高さはHigh/Mid/Lowに、また開口度はclose/open(中間段階としてhalf-close, half-open)に下位区分される。(b)の基準について言えば、舌の前半部分が硬口蓋に向かって高くなる**前舌母音front vowel**と、後半部分が軟口蓋に向かって高くなる**後舌母音back vowel**に大きく分類できる。最後に(c)の基準は、唇が丸くなるか(**円唇母音rounded vowel**)、丸くならないか(**平唇母音unrounded/flat vowel**)という二項的な対立として捉えられるのが一般的である。

(a)舌の高さ(開口度)、(b)高くなる部分、(c)唇の形状の三つの基準は、いずれも母音の**音色**(ねいろ)timbre(=**音質**quality)を決定する要素であるが、これに時間的長さという尺度を加えると、母音はさらに**短母音short vowel**と**長母音long vowel**、**二重母音diphthong**などに下位区分される。短母音と長母音が問題となるのは、母音の長さが弁別的な機能を果たす——つまり語の意味を区別するのに役立つ——言語において、たとえば[i]と[iː]を区別して捉える必要がある場合である。二重母音と長母音は、時間的な推移の過程で母音の音色が変わるか変わらないか(e.g. [ei] vs. [eː])という違いであり、両者の区別はむずかしい。歴史的にみても、長母音が二重母音化したり、逆に二重母音が長母音となったりすることがしばしば観察されている。また、長母音と二重母音はともに、一つの音節内に生じることがその定義に含まれており、音節

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com